施設紹介 島根大学医学部附属病院

永井 秀政　HIDEMASA NAGAI
島根大学　医学部　脳神経外科

今回、日本定位・機能神経外科学会ニューズレターで施設紹介の機会を得ることができ、皆様に御礼申し上げます。

当院は、1975年に島根医科大学附属病院として設置され、2004年に法人化にともない島根大学医学部附属病院に名称変更しています。脳神経外科は1979年に初代の石川 進 先生のもとに開講し、1989年に森竹 浩三 先生に続き、2009年に秋山恭彦　先生が3代目の教授に就任しております。これまで当院では、腫瘍や血腫除去などの定位脳手術の経験のみで、脳深部の凝固術や刺激術などの機能神経外科の経験はありませんでした。そこで、機能神経外科を始めるに至った経緯を説明します。

まず、私ごとですが最初に機能神経外科に触れたのは学生の講義プリントでした。当時の知識でパーキンソン病はL-DOPAで克服され、機能神経外科は風の中のロウソクの灯火というのが学生時代の印象でした。脳神経外科教室に入局してからも、脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷が中心であり、私の仕事は森竹 前教授のご指導のもと脳神経超音波に関する研究でした。2002年にピッツバーグ大学にガンマナイフの留学をした際に、初めてDBS治療を目撃し、機能神経外科に対するイメージが負から正へと逆転したのです。秋山教授の就任のおりに脳神経外科治療の幅を広げることが検討され、これまで経験のない治療として機能神経外科を始めることを決意しました。しかし残念ながら当院には全く歴史がありませんでした。手探りの中、まず2010年に日本定位・機能神経外科学会へ入会し、大会に参加しました。さらに、2011年春には東京女子医大の平孝 臣 先生のもとへ手術見学に押しかけ、機能神経外科の魂を吹き込んでもらいました。同年冬には日本大学板橋病院で定位脳手術トレーニングを受け、DBS技術の極みを教えて頂きました。こうした経験から、これまでの脳表面の手術から脳深部の手術へと興味がわき、島根にもDBSを導入したいとの思いがますます強くなりました。しかし、まだまだDBS導入の道のりは長く、根気を要するものでした。まず費用です。大学病院では見通しや実績がないところに経費はつかないのが鉄則です。そこで、大学病院内で神経内科との関係を密にして見通しをたて、さらに日本定位・機能神経外科学会の技術認定を取得することで実績とすることにしました。出雲から通って技術認定を取得するために、岡山大学脳神経外科の伊達教授にお願いし、足かけ3年で技術認定を取得することができました。こうした準備を経て、2016年4月に脳深部刺激療法による機能神経外科治療システム を稼働できました。2016年6月に島根県内で初のDBS治療を施行することができました。スタッフともに慣れない手術でトラブルもあり、手術時間を要しました。さらに2017年2月に2例目を施行し、予定範囲内で手術を終了しました。この2例ともに、倉敷ニューロモデュレーションセンター長の上利 崇 先生にご指導頂き、あらためて感謝申し上げます。

企画から6年の年月を経て、経験のない施設でDBSを初期導入しました。新たな治療法の導入は術者一人や脳神経外科のみでは困難なことが多く、周辺のサポートが大切であることを実感しました。DBSの対象はパーキンソン病や本態性振戦、ジストニアなどに限られており、病院にとっては大きな収益源ではありませんが、脳神経外科専門医育成の基幹施設として研修に必須の手技で、高度の専門性を要し、大学病院での機能神経外科を行うところの重要性は高いと思われました。今後は、治療の質の向上と次世代への継続を主眼とし、機能神経外科の裾野を広げていきたいと思います。

最後に、島根大学脳神経外科の秋山教授ならび教室員の皆様、神経内科教室、岡山大学脳神経外科の機能神経外科チームの皆様に御礼申し上げます。